

名古屋からの手紙

Cartas desde Nagoya

～クマの出現をめぐって～

43



田中 敬一

プロフィール

愛知県立大学名誉教授。1954年、大阪生まれ。大阪外大大学院修士課程修了。ラテンアメリカの文学・文化専攻。メキシコ政府給費留学生としてメキシコ国立自治大学に学ぶ。訳書にR・カスティーリョ著「バレン・カナン」(2002年、行路社)、著書に「メキシコルネサンス省察」(2018年、あるむ)。kamemarco@gmail.com

新しい年を迎え、皆さまには元気でお過ごしのことと思います。

さて昨年私たちを震撼させたニュースの一つに、クマの出現があります(Una de las noticias que nos horrorizaron el año pasado es la aparición de los osos.)。環境省の調査によると、令和7年は、ツキノワグマ出没件数は過去最多を記録。それに伴い、ご存知のように、東北地方では痛ましい人身被害が何件が発生しました。名古屋市近郊の足助や猿投、また保見でも、クマの目撃情報が寄せられています。豊田市のHPには、「これまで市内にはクマは生息しないと考えられていましたが、現在ではクマとの遭遇がいつ、どこで起きても不思議でない状況です(hoy en día no es de extrañar que el encuentro con los osos pueda ocurrir en cualquier momento y en cualquier parte.)」とあります。

この原因はこれまで「エサとなるブナやナラの実が凶作だから」と指摘されてきましたが、必ずしもそれだけではないようです。農村の過疎化(despoblación rural)が進み、耕作放棄地(campo de cultivo abandonado)が増えると、「里山」が消えて行きました。この緩衝地帯(zona parachoque)が無くなったため、本来人間に対し臆病だったク

マが、エサを求め人間の生活圏に現れるようになりました。

そして生息域が広がると、クマは人間を怖れなくなりました。そして人間とバッタリ出会うと、攻撃的になり、人を襲うことになります。子グマを連れた母グマはとりわけ凶暴です。こうなると「クマとの共生」(la convivencia con los osos)どころか、私たちは身の安全を確保しなければなりません。自衛隊に出動要請が出たのは、やむを得ない判断と言えるでしょう。

太古より私たち日本人は、台風や地震といった自然災害の前では無力であり、自然に対し畏怖の念を持って暮らしてきました(Desde el tiempo remoto los japoneses, ..., hemos vivido con un temor de la naturaleza)。今回のクマの出現は、危害を加える可能性のある野生動物とどのように向き合っ



クマ出現を警告する猿投山登山道

小さなピカソたち

"Los pequeños Picasso"

川上ミネ



プロフィール

長久手市出身、ピアニスト、作曲家。ミュンヘン国立音楽大学ピアノ科卒業、マドリッド王立音楽院修了。キューバ(国立音楽大学講師を経て、現在は京都とサンチャゴ・コンボステラを拠点に活動中。代表作「モリゾーとキッコロ」(愛・地球博/NHK)、「猫のしっぽ、カエルの手」、「やまと尼寺精進日記」(以上NHK Eテレ)、「Four Seasons in Japan」(NHKワールド)ほか。川上ミネのドキュメンタリー特番「音のかたち」(NHK総合、NHKワールド)*スペイン語版はNHKワールドで現在公開中。現在放送中の「しあわせ気分」のスペイン語(NHK Eテレ)のコーナー「川上ミネのしあわせ探し」に出演中。



「意思」 堀口忠彦 原画 2020年制作

今年、長く親しくしてきたアニメーター堀口忠彦さんの、初めての海外原画展をサンティアゴ・デ・コンポステーラで開くお手伝いをしました。「まんが日本昔ばなし」「みんなのうた」……昭和に生まれた私たちの幼い頃の記憶には、いつも堀口さんの絵が寄り添っていました。手塚治虫さんとともに日本アニメの礎を築いた方であり、その原画はまさに日本の宝物です。20年前、愛知万博の「モリゾーとキッコロ」の音楽制作を通して堀口さんにお会いできたことは、私の人生にとっても大きな刺激であり道標となりました。

近ごろスペインでも日本のアニメや漫画は大人気で、日本に行ったことがなくてもアニメをきっかけに日本語を覚え、楽しそうに話してくれる学生にサンティアゴで出会うこともしばしばです。そんな温かな土壌の中、大学や財団の協力をいただき、大聖堂前の歴史ある宮殿で堀口さんの個展が実現しました。

会場では、堀口さんの絵がその土地の光と共鳴し、日本とはまた異なる色彩を見せてくれました。音楽のように場所と響き合う絵の不思議さに惹かれ、私自身、何度も通いました。

ある日、小学生たちが「自分たちも描いてみたい」と言い出し、授業で絵を描くことになりました。仕上がった作品を見てビックリ!ダリもピカソもミロもこの国から生まれたのだと、子どもたちの果てしなき自由な想像力が教えてくれるようでした。そして会期中、堀口さんは81歳で静かに旅立たれました。この展覧会も、子どもたちが描き始めたことも、絵の神様がそっと背中を押してくれた出来事だったのかもしれませんが、「自分の先生は子どもの絵だよ」。生前よく堀口さんが語っていたその言葉が、いまでも優しく響いてきます。

